

# 英語圏児童文学会 第52回研究大会



The Japan Society for Children's Literature in English



日 時：2022年11月12日（土）-13日（日）

会 場：奈良女子大学（対面開催）

英語圏児童文学会 第52回研究大会実行委員会

# 第52回研究大会開催にあたって

会 長 川 端 有 子

英語圏児童文学会の皆さま

ついにお目にかかったの大会の開催がかないました。

わたしたちの学会の名前が変わってから、そしてわたしが会長に就任してから初めての対面の学会です。長い長い2年半のオンライン生活でした。それはそれなりの利点もあり、こんなことでもなかったら、さわりもしなかったIT技術に詳しくなったり、オンライン開催のおかげで、例会集客数が増えたり、悪天候でも遠くても、学会に参加できるのは便利ではありましたが、なんととっても顔を合わせて話をする、研究発表や講演の後で気楽に感想を言い合うといった機会には長らく恵まれず、つもる話にきっときりもないだろうと、この大会の週末を待ちわびています。おりしも秋たけなわの古都奈良での、初めての開催になろうかと思われます。この大会の開催に骨折ってくださった西日本支部の皆さまにも、会場を提供してくださった奈良女子大学にも、本当に感謝の気持ちは尽きません。

英語圏児童文学会として新たに出発したこの学会ですが、52年の歴史を重ね、少しずつ形を整えてきたといえるでしょう。昨今の研究事情の厳しさ、研究者の就職状況の悪化、とりわけ人文科学が冷遇されるこの状況ではありますが、わたしたち一人ひとりができることを少しずつ積み重ね、なんとか前進していきたいものです。そしてわたしは、長い間この学会に育ててもらったそのことを感謝し、今度はそのお返しとして、できるだけのことをやっていきたいと、心から願っています。

全国の会員が集うこの大会を機会に、古くからの絆を結びなおし、新たな出会いを期待して、出会うことが、みなさんの研究のためのよきインスピレーション源になり、起爆剤となりますように。では、奈良女子大でお会いするのを楽しみにしています！



## 英語圏児童文学会 第 52 回研究大会

### 目次

第 52 回研究大会開催にあたって 会長 川端 有子	1
研究大会プログラム	3
<b>研究発表・シンポジウム要旨</b>	
11 月 12 日(土)	
研究発表Ⅰ・研究発表Ⅱ	5
シンポジウムⅠ 雑誌 <i>Boy's Own Paper</i> とコナン・ドイル	8
11 月 13 日(日)	
研究発表Ⅲ・Ⅳ	11
シンポジウムⅡ 児童文学と自然環境	14
◆大竹英洋氏プロフィール	17
会場のご案内	18
参加に際してのご注意とお願い・入構票	21

## 第 52 回 英語圏児童文学学会研究大会プログラム

### 11月12日(土)

12:20 受付開始

12:50 開会の言葉

13:00 – 14:00 研究発表

**研究発表 I** 教室 A 司会：土居 安子

① 13:00-13:30 渡邊 裕子

「運命」を創造するのは誰か –J. R. R. Tolkien 作品における「運命」という物語の創造–

② 13:30-14:00 相川 隆行

『クマのプーさん』における環境と他者の考察

**研究発表 II** 教室 B 司会：森 有礼

① 13:00-13:30 天野 剛至

トランスナショナル児童文学におけるメタファーとしての〈穴〉についての一考察

② 13:30-14:00 口田 珠加

ロアルド・ダールの児童文学作品における食と gluttony についての考察

14:20 – 16:40 シンポジウム I 教室 A

雑誌 *Boy's Own Paper* とコナン・ドイル

パネリスト：中尾 真理 (奈良大学名誉教授)、多田 昌美、本間 裕子、藤井 佳子 (兼コ  
ーディネーター)

## 11月13日(日)

**10:00** 受付開始

**10:30 – 11:30** 研究発表

**研究発表 III** 教室 A 司会：水間 千恵

① 10:30-11:00 海老塚 日菜子

2 回語られる物語—『世界のはての少年』における語りに着目して—

② 11:00-11:30 梅野 愛子

Louis Erdrich 作 *The Birchbark House* における主人公の自己確立に関する一考察

**研究発表 IV** 教室 B 司会：西村 醇子

① 10:30-11:00 菱田 紫乃

W. B. イイツ *Cathleen Ni Houlihan* (1903) とダイアナ・ウィン・ジョーンズ *Howl's Moving Castle* (1986) の比較

② 11:00-11:30 大藪 加奈

Traci Chee の *A Thousand Steps into Night*(2022)における日本描写

**11:30 – 14:00** 昼食、支部会、総会

11:30-12:00 支部会 東日本支部：教室B、西日本支部：教室A

12:00-13:00 昼食 教室A, B

13:00-14:00 総会：教室 A

**14:20 – 16:40 シンポジウム II** 教室 A

**児童文学と自然環境**

パネリスト：大竹 英洋(写真家)、松下 宏子、浅井 千晶、内藤 貴子

コーディネーター：横川 寿美子

**16:45** 閉会の言葉・諸連絡

## 第 52 回 英語圏児童文学学会研究大会 研究発表・シンポジウム要旨

11 月 12 日 (土)

### 研究発表 I

#### ① 渡邊 裕子 (山口大学)

「運命」を創造するのは誰か—J. R. R. Tolkien 作品における「運命」という物語の創造—

本発表では、J. R. R. Tolkien の神話作品 *The Silmarillion*(1977)における Túrin にまつわる挿話を中心に、「『運命』を決定づけるものの正体」という問題を考察する。この挿話では、父親の行いの為に邪神に呪いをかけられた主人公 Túrin の悲劇的な一生が描かれるが、注目すべきことは、主人公に悲劇をもたらすものが、実は外部からの呪いではなく、主人公自身の性状であることが暗示されている点だ。この点に関しては先行研究でも確認されてきたが、本発表では、これを別の視点から捉え、悲劇の原因を、単に主人公の独善的な性格に帰すのではなく、彼が、「呪われた男」という自身の立ち位置に意識的であったこと、つまり自分は呪われているという物語を信じ、その物語の中で与えられた役割を全うする為に行動しようとした為だと考察する。

Túrin は、人生の転換期にあたって、何度も呼び名を変える。それはあたかも、「自分は呪われている」という伝聞を拠り所に、悲劇を全てその呪いの物語という枠組みで捉え、名づけることで自身の役柄を確認し、納得しようとするかのようである。言い換えれば、Túrin は自ら役名を与えることで、「呪われた男の悲劇」という架空の物語を演じ、それに従って行動することで結果的に、真に呪われた男としての運命を決定してしまっているのだ。このように、自身の置かれた状況を、ある種の物語やそこでの役柄を通じて理解しようとする人物は、*The Lord of the Rings*(1954-55)をはじめとする Tolkien の他作品にもみられ、ある物語を受け入れることが、受け手の人生のあり方を形作る役割を持つことが強調されている点を確認したい。

### 研究発表 I

#### ② 相川 隆行 (北陸大学)

『クマのプーさん』における環境と他者の考察

A.A. ミルンの『クマのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*)及び『プー横町にたった家』(*The*

*House at Pooh Corner*)では、森という場所が舞台になっているが、作品では環境がどのような効果を持つのかを考察したい。特に、それが他者との関わりにおいてどのような影響を与えるのかという点で、作品の分析を試みたい。

作品における森は、一種の理想郷として映る架空の場所であるが、実在する場所がモデルである。そこは、作者ミルンが愛したアッシュダウン・フォレストや五百エーカーの森がモデルになっており、そうした環境について知ることが作品を読み解いていく鍵となる。また、現実にミルンが少年時代に兄のケンと過ごした場所であり、大人になってからは息子のクリストファー・ロビンと過ごした場所であることが実体験としてあり、作者の経験が作品に反映されているのも事実である。いわば、作品には作者自身の幸福な思い出があり、それゆえに理想郷とされる世界観が描かれているわけである。環境とは単に場所として存在するだけでなく、その場にいる人間の思いとの相互作用によって作り出されるものであろう。

特に、他者と理解し合える環境とはどのようなものであるかを明らかにすることが本論の目的である。環境が人に及ぼす作用については「アフォーダンス(affordance)」といった生態心理学の知見が援用されるが、文学作品という世界においては描かれた世界であるという特徴があり、その特殊性を分析することが可能であろう。つまり、ここで考察したいのは、文学作品における環境とそこに存在する者との相互作用である。

## 研究発表 II

### ① 天野 剛至

#### トランスナショナル児童文学におけるメタファーとしての〈穴〉についての一考察

〈穴〉(ここでは手掘りの小穴、洞窟、坑道、シェルター、空井戸などさまざまな閉鎖空間として広義にとらえる)は児童文学においてたびたび登場するある種のイメージを想起させるメタファーである。基本的に〈穴〉は、身動きや視界が制限された空間がもたらす不安、恐怖、パニックなどのネガティブなイメージを連想させる。その一方で、アリスが滑り落ちる巣穴やアクセルらが探検する地底世界のように、〈穴〉は「移行」の象徴として未知の世界への期待感を喚起することもままある。

本発表では、ルイス・サッカーの *Holes* (1998)、エリン・エントラダ・ケリーによる *Hello, Universe* (2017) など〈穴〉が登場するトランスナショナル児童文学4作品を取り上げる。理論的枠組みとして、ヴィクター・ターナーの「リミナリティ (境界領域)」論とホミ・バーバの「〈中間の〉空間」論を援用する。すなわち、〈穴〉をメタフォリカルなトランスナショナル空間として捉え、この文化横断的空間をアイデンティティがどっちつかずの状況に

あるリミナリティとみなし、同時にバーバがいうところの二つの異なる文化が相互作用して意味の書き換えがおこなわれる〈中間の〉空間としての役割を見出す。本発表では、時間・空間・感覚の三つの異なる視角からテキスト分析を行い、メタファーとしての〈穴〉がいかなる意義をもつかを考察する。これらの物語では、(前)思春期の登場人物が少年少女から青年へと移行するカミング・オブ・エイジの過程で〈穴〉に遭遇し、かれらのアイデンティティが文化横断的に、時に世代縦断的に、再構築されるさまが描かれる。かくして、主人公が自らの主体性を磨き、新たなアイデンティティを構築する「戦略の場」としての〈穴〉の表象が浮かび上がってくる。

## 研究発表 II

### ② 口田 珠加

#### ロアルド・ダールの児童文学作品における食と *gluttony* についての考察

本発表では、イギリスの小説家ロアルド・ダールの文学作品におけるダールが描写する食について論ずる。ダールの作品は多岐にわたり、大人向け、子ども向け問わず小説や詩などが出版されている。

ダールの作品にはユーモアの中に風刺が効いているのが特徴だが、その根底には彼独自の *virtue* があり一貫性が見受けられる。『ダニーは世界チャンピオン』(1975)作中での食事は、ダニーの家族と、それを支える周りとのつながりとして描かれている。しかし、キジを大量に飼育しているヘイゼル氏は悪役とされ、食料であるキジを大量に失うという、彼にとっては救いのない結末となっている。

『チャーリーとチョコレート工場』(1964)、『魔女がいっぱい』(1983)には、食べ物を貪る子どもの描写があり、先行研究ではキリスト教では大罪の1つとされる *gluttony* がそれにあたりと指摘がされている。一方『魔女がいっぱい』において、子どもが魔女によって雌鶏にされ、その卵を家族や主人公の祖母が食べるという間接的な食人行為が見受けられる。

また、大人向けの短編小説では、食にまつわるグロテスクユーモアが見受けられる。「おとなしい凶器」(1953)では夫を殺した仔羊の腿を警察に食べさせ証拠隠滅を図る妻マロニーが登場する。「豚」(1960)では、菜食主義者の元で育てられたレキシントンが豚料理を食べたことがきっかけで調理過程に興味を持ち食品加工工場に行くも、自分も豚と同じように加工されてしまうという結末となっている。ダールの描く食に焦点を当て、彼にとっての *virtue* と *gluttony* や、グロテスクユーモアについて考察していく。



## シンポジウム I

### 雑誌 *Boy's Own Paper* とコナン・ドイル

パネリスト

中尾 真理 (奈良大学名誉教授)

多田 昌美、本間 裕子、藤井 佳子(兼コーディネーター)

はじめに

藤井 佳子

1799年設立の福音主義系宗教団体 Religious Tract Society (以下 RTS) は、信仰を説くトラクトを頒布していたが、やがて物語の単行本、そして月刊 *The Child's Companion* (1824-1922)、週刊 *Boy's Own Paper* (1879-1967)、週刊 *Girl's Own Paper* (1880-1908) などの雑誌を刊行して成功した。

今春、発足10年を迎えた RTS 研究会は、2018年度研究大会でのシンポジウム「RTS とイギリス児童文学」や、西日本支部研究会で研究発表を重ね、RTS について論考してきた。今回はシャーロック・ホームズで脚光を浴びる直前のコナン・ドイル (Sir Arthur Conan Doyle, 1859-1930) が *Boy's Own Paper* (以下 *BOP* とする) で計7作品を、主にクリスマス号 (1883-1887) で発表していたことに着目して、初期 *BOP* とコナン・ドイルについて考察する。まず、ジェイン・オースティンの専門家、シャーロキアンでもある中尾真理氏にお話いただく。

### 出版代理人コナン・ドイル

中尾 真理 (奈良大学名誉教授・招聘講師)

コナン・ドイルが創造したシャーロック・ホームズは、今やイギリスを代表するキャラクターとしてシェイクスピアやハムレットを凌ぐ知名度を得ている。「日本シャーロック・ホームズ・クラブ (JSHC)」は世界各国にあるホームズのファンクラブの一つで、例会、全国大会、セミナー、会報や機関誌の発行を通じて親睦、情報交換を行っているが、研究発表にも力を入れている。関西支部は全国の支部の中でも最初に創立され、研究誌『シャーロック・ホームズ研究』は通巻第26号に及んでいる。会員の興味は「聖典」や推理小説にとどまらず、イギリスの歴史や社会、ヴィクトリア朝文化一般に及んでいることが特徴である。

コナン・ドイルは雑誌『ストランド・マガジン』のホームズ連載で人気が出る以前は、文筆家として立つのに苦勞をした。次々に作品を書いて出版社に送るが、なかなか取り上げられなかった。その頃、最初に掲載してくれた雑誌の一つが、少年雑誌 *BOP* だった。

ホームズものは長編短編合わせて 60 編あるが、ベイカー街にあっても事件のルーツはアメリカ、インド、アフリカ、オーストラリアなど大英帝国内の植民地に端を発していることが多い。本講演では、まず、①シャーロックアンについて、次に②「聖典」と「ホームズ研究」について紹介する。③そして、シャーロックアンがコナン・ドイルを「ホームズ物語」の作者と認めず、「出版代理人」と考えていることを紹介して、作家コナン・ドイルの実像を考える。最後に④「ホームズ研究と大英帝国」で、「ホームズ物語」の背景となる大英帝国の植民地に注目する。イギリスに支配され迫害されたアイルランドのカトリック教徒を両親に持つコナン・ドイルが、大英帝国の理念を信奉する「愛国者」であったのは不思議とも言える。

### コナン・ドイルの *BOP* 掲載作品と知識要素

多田 昌美

*BOP* には物語だけでなく知識・娯楽系の記事も多く掲載されており、その内容は、城や有名校の紹介、旅行記、生物や鉱物について、動植物の世話、工作、スポーツ、手品など多岐にわたっている。連載物語にも英国以外の土地を題材にした作品が多数あり、*BOP* が読者の知的好奇心を満足させる誌面作りを意識していたことが伺える。クリスマス号は通常版と比較すると物語や詩の分量が多いが、冬の娯楽やクリスマス時期の昆虫の生態、手品のやり方などについての記事もあり、知識系の要素を忘れてはいない。

クリスマス号に掲載されたドイルの作品を見ると、第 1 作の 'An Exciting Christmas Eve; or My Lecture on Dynamite' (1883、小池滋監訳『コナン・ドイル未紹介作品集①ササッサ谷の怪』に収録) は語り手がダイナマイトの作成法を講義して欲しいと頼まれるところから始まり、実際に作成法の一部とおぼしき内容が作中で紹介される、'The Stone of Boxman's Drift' (1887、小池滋監訳『コナン・ドイル未紹介作品集②真夜中の客』に収録) は南アフリカのダイヤモンド鉱山を舞台にした二人の鉱夫の物語で、ダイヤモンド鉱山についての記述が前半部分の多くを占めている。また 'Cyprian Overbeck Wells. A Literary Mosaic' (1886、笹野史隆訳『コナン・ドイル小説全集第 7 巻「ポールスター号の船長 下」』に収録) は著名な作家の文体模写を多く含んでおり、英文学史という知識をベースにした作品だと言えよう。今回はこういった各分野の知識という要素に着目し、*BOP* の特質とドイルの掲載作品の関わりについて見てゆきたい。

## **BOPに連載された『ジェレミーおじの家』**

本間 裕子

ドイルが *BOP* に寄稿した作品の中で、唯一、クリスマス号ではない通常の号に計 7 週にわたって連載(1887.1.8—2.19)された‘Uncle Jeremy’s Household’(小池滋監訳『真夜中の客』に収録)を取り上げる。

医師資格取得のために猛勉強中の「私」は、友人ジョン・サーストンの誘いで、ヨークシャーにある彼のおじの家に逗留する。ジェレミーおじの家には、おじのほか、怪しげな秘書、インドの族長の血を引く女家庭教師と子どもたちがいた。女家庭教師は秘書に弱みを握られているらしい。そんなある日、村に一人のインド人が現れる。友人ジョンの留守中に事件が起こり、秘書の悪だくみと過去の事件の真相を「私」は知る。

## **駆け出し医師の苦勞から、有名作家としての祝辞まで**

藤井 佳子

ドイルが *BOP* に寄せた 7 作品と 1 祝辞のうち、3 作品と 1 祝辞を担当する。‘Crabbe’s Practice’(1884、笹野史隆訳『コナン・ドイル小説全集第 39 巻 赤いランプをめぐる 下』に収録)は、ドイルの書いた一連の医学小説のうちの 1 作である。友人クラブが開業した医院が不振であるため、マンチェスターで医院の助手をする語り手が一計をめぐらせ、医院を繁盛させる。本作品の *BOP* 掲載の事情を紹介するとともに、最終稿と *BOP* 掲載稿に多くの異同があるので、それにも触れる。

‘The Fate of Evangeline’(1885、小池滋監訳『真夜中の客』に収録)は、ヨットによる駆け落ち譚である。マスコミを騒がせた令嬢失踪事件の真相を、語り手ギブズが明かす。 *The Cornhill Magazine* に投稿したが不採用だったため、*BOP* に送って掲載された。

‘Corporal Dick’s Promotion’(1887、「ディック伍長の昇進」として翻訳があるようだが未確認)は計 106 行の詩である。ドイルは生涯に 108 篇の詩を書き、計 4 巻の詩集を出した。短編を得意としたドイルが、ディック伍長の心情を詩で表した意味を考察する。

ドイルは 25 周年を迎えた *BOP* に 1903 年 9 月 5 日付けの祝辞を寄せて、*BOP* がさらに 25 年間、有益な活動を続けることを願い、自分の作品を発表してくれた最初の雑誌の一つであることに感謝した。*BOP* はドイルの予想よりはるかに長く繁栄し、ドイルもまた雑誌 *Strand* を中心に、シャーロック・ホームズで大成功を収めたのである。

**11月13日(日)**

**研究発表 III**

① 海老塚 日菜子 (日本女子大学大学院人間生活学研究科人発達学専攻博士課程)

2回語られる物語—『世界のはての少年』における語りに着目して—

本発表では Geraldine McCaughrean 著『世界のはての少年』(Where the World Ends) における語りを分析する。本作は『ロビンソン・クルーソー』を彷彿とする漂流譚でありながら、その根幹には「物語る」ことのもつ力が描かれている。主人公クイリアムは他の少年たちとともに通過儀礼のため無人島へむかうが、約束の日になっても迎える船が現れず、無人島でのサバイバルを強いられることとなる。クイリアムはこの無人島での体験をのちに少女マーディナに語り伝える。そして、その少女マーディナが語り手となり、クイリアムに起きた出来事を想定された読者へ語る物語が本作『世界のはての少年』なのである。

つまり、本作の語りはクイリアムからマーディナへ、そしてマーディナから想定された読者へ2回にわたって語られている、という伝聞形式の語りである。本発表では、語り手が複数存在することで起こる効果および語り手同士の関係性によって出来事が歪む可能性について分析する。また、一番目の語り手クイリアムからマーディナへの語り、そして二番目の語り手マーディナから読者への語り、計2回のタイミングでそれぞれがどのように語りを操作しているかについても考察する。

**研究発表 III**

② 梅野 愛子

Louis Erdrich 作 *The Birchbark House* における主人公の自己確立に関する一考察

本発表は、ルイーズ・アードリック (Loise Erdrich 1954-) 作 *The Birchbark House* (1999 / 『スピリット島の少女』) における主人公の自己確立を、ポストヒューマニズムを参照しつつ検証してみるものである。*The Birchbark House* は、ネイティブインディアンのオジブワ族の少女オマーカヤズが、赤ん坊のころに天然痘を生きのび、やがて育ての家族をその天然痘から救う一年の物語だ。四季を巡る自然のなかで、オマーカヤズは熊の子と仲良くなり、カラスのアンデグを友とし、最終的に自分の役割を知る。これは、Zoe Jaques の *Children's Literature and the Posthuman* (2018) をその代表格として、昨今しばしば援用されるポストヒューマニズムの観点からすれば、動物や自然の延長としての人間観で描かれた少女の自己形成の物語と見ることができるだろう。

しかし、ポストヒューマニズムは西欧文化圏におけるデカルトの「我」以来のヒューマニズムと表裏をなしている。西欧文化圏外における自然とともに生きて来た人間観からすれば、オマーカヤズの姿は特段に「ポスト」な状態ではないと言える。むしろ、同作第13章におけるオマーカヤズのアンデグとの別れによって突如開かれる主人公の自己の確立は、ポストヒューマニズムを逆さ眼鏡として、自ら発した言葉によって自らの存在が他者から分離する感覚、ロゴスによる分離が描かれていると見ることができるのではないか。これが、本発表で試みる考察である。

#### 研究発表 IV

##### ① 菱田 紫乃

#### W. B. イェイツ *Cathleen Ni Houlihan* (1903) とダイアナ・ウィン・ジョーンズ *Howl's Moving Castle* (1986) の比較

本発表では、W. B. イェイツの戯曲 *Cathleen Ni Houlihan* (1903) とダイアナ・ウィン・ジョーンズによる小説 *Howl's Moving Castle* (1986) の比較を行う。*Howl's Moving Castle* に登場する、義理の母や三人姉妹などの要素は『シンデレラ』の物語を土台にしており、他にも様々な物語から様々な要素を取り入れている。その中、ジョーンズが *Howl's Moving Castle* を書いた時、戯曲 *Cathleen Ni Houlihan* の物語を一つの土台とした可能性を検討する。

*Howl's Moving Castle* と *Cathleen Ni Houlihan* の一つの大きな類似点に、作品最後に老婆が若い娘に姿を変えることが挙げられる。どちらの作品も物語の最初に、老婆が他人の家に入りこむ。そして老婆が家に入る場面は、二作品の細かなところで類似点が見受けられる。

*Cathleen Ni Houlihan* の老婆は、フーリハンの娘キャサリーンその人であり、アイルランドの国を擬人化した人物だといわれる。よそ者をアイルランドから追い出すために、戦ってくれる強い若者を求める。結婚を控えたマイケルという若者は、家を飛び出して、彼女の後を追って行ってしまふ。対して *Howl's Moving Castle* の老婆は、ソフィーという娘が呪いによって変えられた姿である。ソフィーは一人の人間として彼女自身の人生を求め、物語の最後ハウルという若者と結ばれる。

アイルランド文芸復興に携わったイェイツの *Cathleen Ni Houlihan* は愛国的な戯曲となっている。ジョーンズは幼少期に第二次世界大戦を経験しており、彼女にとって戦争は重要な問題となる。*Howl's Moving Castle* を、イェイツによる愛国的な戯曲 *Cathleen Ni*

*Houlihan* の翻案として見た時、ジョーンズが愛国心や戦うということを、どの様に考えていたのか紐解く鍵となるのではないかと考察していきたい。

#### 研究発表 IV

##### ② 大藪 加奈

##### Traci Chee の *A Thousand Steps into Night*(2022)における日本描写

この発表では、日系4世のYA作家 Traci Chee の最新作である *A Thousand Steps into Night*(2022)における日本描写について考察する。*A Thousand Steps into Night* は、日本昔話に出てくるような架空の国 Awara を舞台とするファンタジー小説であり、物語では、17歳の少女 Otori Miuko が自分にとり憑いた女の魔物から解放される方法を求めて旅をする過程で、様々な困難を乗り越える冒険をする。著者のインタビューによれば、日本を舞台にするゲームのような世界を創ろうと意図して書かれた物語であり、表紙に描かれた着物姿の少女の画像からも、日本的な世界を示唆していることが読み取れる。この小説の舞台設定の特徴は、昔話に登場しそうな人の姿に変化自在の鶴娘やキツネっ子、種々の亡霊や魔物とそれを祓おうとする僧や祓魔師が登場すること、そして封建的で男尊女卑の社会構造がある。発表では、これらの昔話のファンタジー性とジェンダー的に制限された社会構造が作品の展開にどう機能しているのかを、物語の構造上類似点がある Diana Wynne Jones の *Howl's Moving Castle* とともに比較しながら述べる。

## シンポジウム II

### 児童文学と自然環境

パネリスト 大竹 英洋 (写真家)

松下 宏子、浅井 千晶、内藤 貴子

(以上、登壇順)

コーディネーター 横川 寿美子

### はじめに

横川 寿美子

加速する気候変動に、プラスチックによる海洋汚染……。今日私たちを取り巻く自然環境は危機的状況にあり、誰もが地球の将来を案じながら、この問題を子どもたちと共有したいと思っている。共有するのはそれらに関する科学の知識だけではない。まずは、私たちの一人ひとりが、それぞれの居場所で、自然と繋がり、自然と共に生きている／生きて行くのだという認識である。文学や芸術は、そのために何ができるだろうか。

当シンポジウムでは、英語圏の児童文学がこの問題にこれまでどう向き合ってきたかを振り返りながら、北米の自然に取り組み続ける写真家・大竹英洋氏の絵本制作に注目する。氏の写真の世界と児童文学の接点を探る中に、新たな発見のあることを期待したい。

### 本の中で旅をする。

大竹 英洋

これほど強く自然に興味を持つようになったのは、大学時代に始めた沢登りがきっかけだった。人間の意識の届かないような場所に、こんなにも豊かな山や森が広がっていることは、都会育ちの自分にとって新鮮な驚きだった。そして、電気も水道もないシンプルなキャンプ生活を通して、当たり前だと思っていた都市での暮らしが、いかに不自然なものとして成り立ち、地球上のほんのわずかな場所の出来事であるかを理解したのである。

自然の奥で長い時間を過ごすことによって、はじめて見えてくるものがある。そう考えて、卒業後はより大きな、野生の息づく自然を求めて海外に出た。世界でも最大級の原生林が広がる北米の湖水地方「ノースウッズ」と出会い、日本では絶滅した野生のオオカミをはじめとする様々な野生動物の姿を追い続けてきた。その原動力となったのは、旅先で出会った光景を写真に収めて、人間と自然とのより良きつながりとは何かを、同時代に生きる人々と共に考えていきたいと言う願いだった。

撮りためた写真を発表するには様々な手段がある。が、その中でも、早くから写真絵本に携わることができたのは幸運だった。福音館書店のノンフィクションシリーズ「月刊たくさんのふしぎ」で4冊、さらに赤ちゃん向けの「こどものとも 0.1.2.」や2～4歳を対象とした「こどものとも年少版」からもそれぞれ一冊ずつ発表している。対象年齢によって判型やページ数、使える語彙に違いはあるが、共通しているのは、先に企画や構成ありきで撮影した写真は一枚もないこと。そして、自分の発見や感動をただ伝えるのではなく、あくまで読者自らがその本の中を旅して、何度も森へ出かけていけるような本を目指したという点だ。そのためには、本を閉じた後でもずっとその時間が流れ続けているような、綻びのない一つの世界を立ち上げなくてはならない。既存の写真のみでそれを構成するのは非常に困難で、その試みが成功したかどうかは読者の判断に委ねるしかないが、編集者やデザイナーのアドバイスを受けながら、これまでに出版した6冊の写真絵本がどのように生まれてきたのか、この機会にひとつずつ紐解いてみたい。

### アーサー・ランサム作品における自然 ——挿絵に描かれた野鳥の役割を中心に——

松下 宏子

アーサー・ランサム（1884-1967）の『ツバメ号とアマゾン号』シリーズ全12巻（1930-1947）は、主要登場人物の子どもたちがイングランドの湖水地方・ノーフォーク湖沼地帯・スコットランドのヘブリデス諸島などを舞台に、主に小帆船を操って探検家や海賊を名乗って様々な冒険をする休暇冒険物語である。彼らの冒険は、他にも登山・宝探し・北極探検・鳥類保護・採鉱・測量・探偵・写真撮影など多岐にわたっているが、ごっこ遊びを超えるリアルな活動も多く、ほぼ全ての冒険は自然のなかで繰り広げられる。そのなかで野鳥を含む様々な動物も登場する。

なかでもノーフォーク湖沼地帯を舞台にした第5巻『オオバンクラブ物語』(*Coot Club*, 1934) とその後日譚にあたる第9巻『六人の探偵たち』(*The Big Six*, 1940) と、第12巻『シロクマ号となぞの鳥』(*Great Northern?*, 1947) は、野鳥の巣と卵を守る子どもたちの物語である。干潟や沼沢地などの測量を描いた第8巻『ひみつの海』(*Secret Water*, 1939) でも野鳥への言及が多い。リアリティにこだわるランサムは、シリーズを通して、野鳥など動物の挿絵も、写真のように細部を正確に描いている。

ここでは、これらの巻を中心に、初期の版の挿絵にも注目して、野鳥などの動物がどのように描かれているかを探り、それらの動物の占める位置を考察する。ノーフォーク湖沼地帯を舞台に19世紀後半に描かれたG. Christopher Daviesの冒険物語との違いも手がかりに



したい。

「センス・オブ・ワンダー」を育むために  
——レイチェル・カーソンのメッセージ——

浅井 千晶

人為的物質による環境汚染に警鐘を鳴らした『沈黙の春』(*Silent Spring*, 1962)の著者レイチェル・カーソン(1907-64)は、子ども時代の自然体験の大切さを述べたエッセイ『センス・オブ・ワンダー』(*The Sense of Wonder*, 1965)も著わしている。同書はもともと、1956年に「子どもたちに不思議さへの目を開かせよう」(“Help Your Child to Wonder”)という題で女性雑誌に掲載されたものである。

「幼い子ども時代は、様々な情緒やゆたかな感受性を育む土壌を耕すときである」という『センス・オブ・ワンダー』のメッセージはよく知られているが、子ども時代に感性の土壌を耕すのはもちろん自然体験だけではない。幼いカーソンは母親と一緒に身近な自然を探検し、観察しただけでなく、ビアトリクス・ポターの動物物語を愛読し、みずからも物語を創作した。10代に入ると児童雑誌『セント・ニコラス』(*St. Nicholas Magazine*)に投稿し始め、鳥の巣探しに遠出した一日を描写するものなど計5編の作品が掲載された。

本発表では、カーソン自身のセンス・オブ・ワンダーの精神が育まれた過程を確認した後、科学者・作家となったカーソンが次世代へのメッセージとして残した『センス・オブ・ワンダー』を児童文学との関わりに留意しつつ検証する。また近年、カーソンの評価の確立を受けて、彼女の人生や功績を次世代に伝える絵本や学習読み物が数多く出版されているので、いくつか取り上げ、カーソンの自然体験と読書体験がどのように描かれているか紹介する。

〈遠・中・近〉景のポエティクス——自然と人間とを繋ぐ詩的想像力

内藤 貴子

写真家であり、写真絵本作家・詩人でもある大竹英洋氏の作品には、大自然に息づく命の躍動や、ウィルダネス(原生自然)という、自然と乖離して暮らす都市生活者にとっての遠景を、読者の近景へと一気にひきこむダイナミズムがある。遠景と近景のあいだに横たわる中景——自然と人間との中間領域——に生きる人々の、遠景と近景を繋ぐ視点や生き方も随所に示されているように感じる。論者は写真について知識がなく、大竹氏の作品を専門的に評することはできないが、環境児童文学研究の論点に通じる、遠景と近景を繋ぐ際に媒介となる詩的想像力が、大竹氏の作品にも満ちていると考えている。

今回の話題提供では、こうした大竹氏の作品から読みとれるモチーフや表現方法のいくつかの点に照らして、現代イギリス児童文学作品を考えてみたい。フランス南部の大湿地帯カマルグを舞台に、野生のフラミンゴをはじめ動物たちと心を通わせることのできる少年と、彼を取り巻く人々の生きざまを描くマイケル・モーパーゴ（1943-）の『フラミンゴ・ボーイ』（*Flamingo Boy*, 2018）、イギリスの人里離れた森の“wild”な環境で、自然を熟知する父に育てられた少女が、あまりに遠く感じる都市ロンドンで、やはりあまりに遠くにしか感じられなかった母と再会しふたたび暮らしを共にする、Katya Balen(1989-）の *October, October* (2020)を扱いながら、原生自然と人間社会との中間領域に生き、両者間の軋轢に翻弄されながらも、自然と共に生きること、自らの内に息づく自然とも共に生きることを模索する登場人物たちの生きざまを考える。

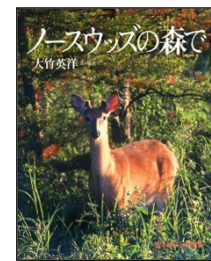
(本研究は JSPS 科研費 JP20K00448 の助成を受けたものです)

## 写真家 大竹英洋（おおたけ・ひでひろ）

◆1975年京都府舞鶴市生まれ、東京都世田谷区育ち。一橋大学社会学部卒業。◆1999年より北米の湖水地方「ノースウッズ」をフィールドに野生動物、旅、人々の暮らしを撮影。人間と自然とのつながりを問う作品を制作し、国内外の新聞、雑誌、写真絵本で発表している。

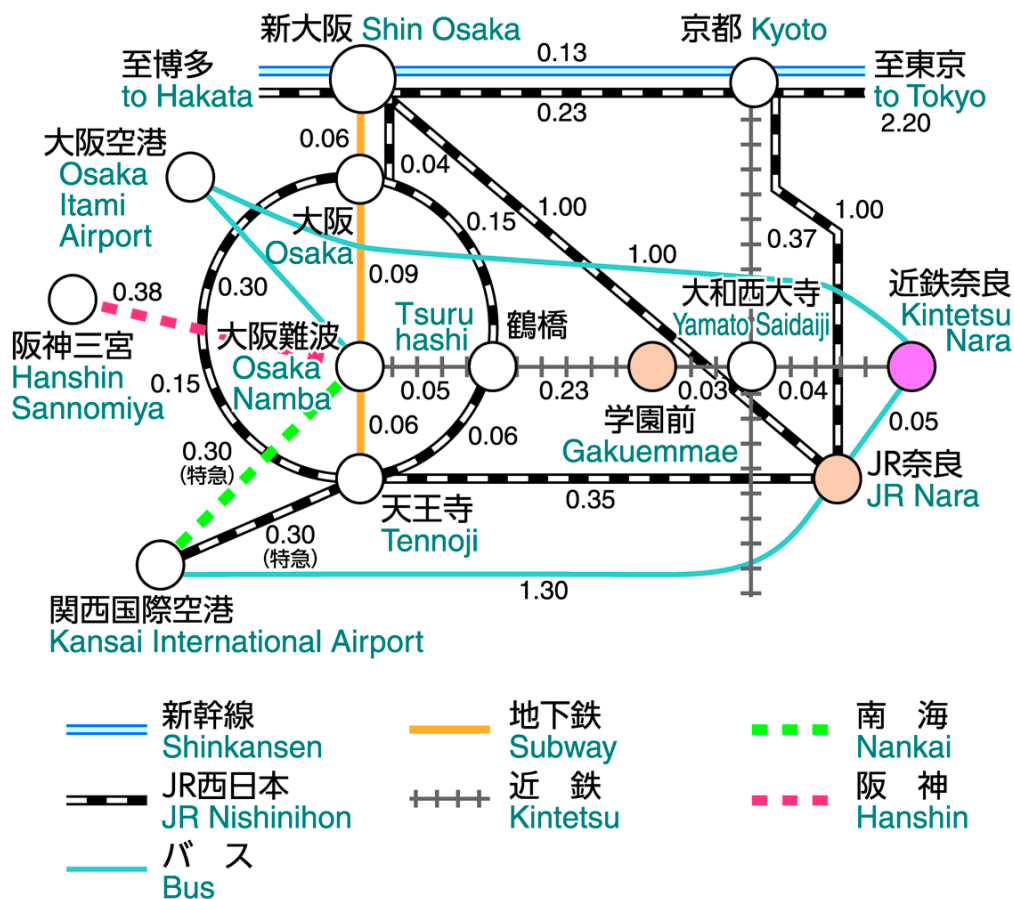
◆主な写真絵本に『ノースウッズの森で』、『春をさがして カヌーの旅』、『もりはみている』など(以上全て福音館書店)。

◆2011年、NHKBS「ワイルドライフ」に案内人として出演。2018年、写真家を目指した経緯とノースウッズへの初めての旅を綴ったノンフィクション『そして、ぼくは旅に出た。 はじまりの森 ノースウッズ』（あすなろ書房、後に文春文庫）で「第七回梅棹忠夫・山と探検文学賞」受賞。「日経ナショナル ジオグラフィック写真賞 第7回ネイチャー部門、第9回ピープル部門最優秀賞」受賞。2021年、撮影20年の集大成となる初の写真集『ノースウッズ 生命を与える大地』（クレヴィス）にて「第40回土門拳賞」受賞。



## 会場のご案内

奈良女子大学 〒630-8506 奈良市北魚屋東町 Tel 0742-20-3204 (代表)



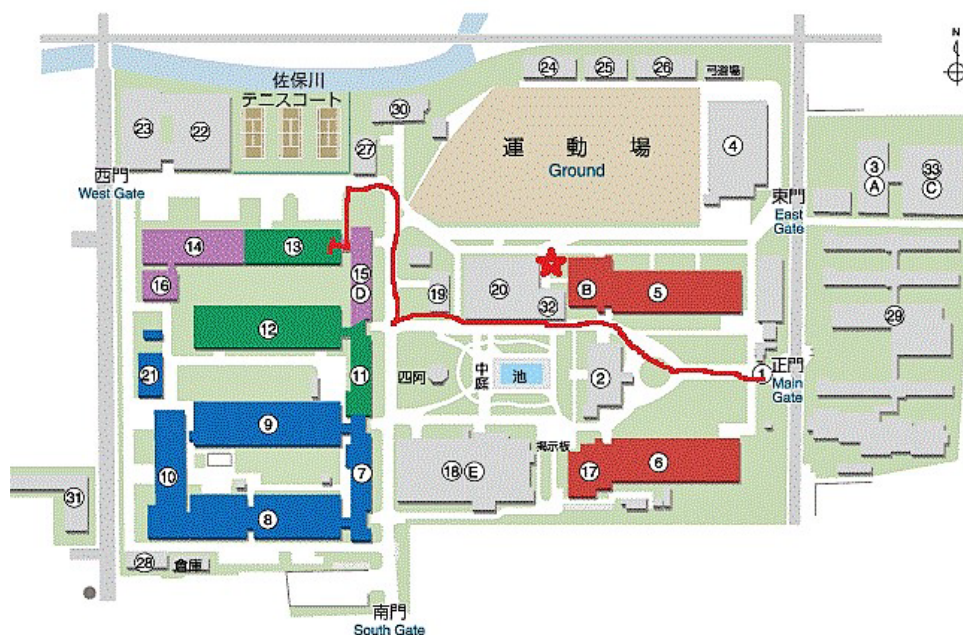
・最寄り駅：近鉄奈良駅 1 番出口より徒歩 5 分（正門からお入り下さい）

J R 奈良駅 近鉄奈良駅までバス 5 分+徒歩 5 分

(<http://www.nara-wu.ac.jp/nwu/intro/access/map/>)

・研究大会会場：E 棟 1 階（地図⑬番）

自動販売機コーナー（地図★）



① 正門・守衛室（重要文化財）

Main Gate・Guardroom (Important Cultural Property)

② 記念館（重要文化財）

Memorial Hall (Important Cultural Property)

③ 本部管理棟

Administration Hall

④ 講堂

Auditorium

⑤ 文学系N棟・

国際交流センター

N Hall (Faculty of Letters)

International Exchange Center

⑥ 文学系S棟

S Hall (Faculty of Letters)

⑦ 理学系A棟

A Hall (Faculty of Science)

⑧ 理学系B棟

B Hall (Faculty of Science)

⑨ 理学系C棟

C Hall (Faculty of Science)

⑩ 理学部G棟

G Hall (Faculty of Science)

⑪ 生環系A棟

A Hall (Faculty of Human Life and Environment)

⑫ 生環系D棟

D Hall (Faculty of Human Life and Environment)

⑬ 生環系E棟

E Hall (Faculty of Human Life and Environment)

⑭ 大学院E棟

E Hall (Graduate School of Humanities and Sciences)

⑮ 大学院F棟

F Hall (Graduate School of Humanities and Sciences)

⑯ 総合研究棟H棟・臨床心理相談センター

H Hall (Integrated Projects Research)

Center for Clinical Psychology

⑰ 大学ラウンジ

Lounge

⑱ 学術情報センター

Academic Information Center

⑲ 保健管理センター

Health Care Center

⑳ 学生会館

University Union

㉑ R・I 総合実験室

Radioisotope Laboratory

㉒ 第1体育館

First Gymnasium

㉓ 第2体育館

Second Gymnasium

㉔ 文化系サークル共用施設

Club House

㉕ 音楽棟

Music Hall

㉖ 課外活動サークル施設

Facilities for Extracurricular Activities

㉗ 合宿所

Training Camp House

㉘ 埋蔵文化財調査室

Archaeology Research

㉙ 寄宿寮・国際学生宿舎

Dormitory/International Student House

㉚ 佐保会館（同窓会）

Alumni Hall

㉛ 国際交流会館

International House

㉜ 国際交流プラザ

International Plaza

㉝ コラボレーションセンター・

共生科学研究センター

Collaboration Center/ KYOUSEI Science Center for Life and Nature

Ⓐ 総務・企画課、財務課、

施設企画課

General Affairs and Planning Division, Financial Division, Facility Planning Division

Ⓑ 国際課

International Division

Ⓒ 研究協力課

Research Cooperation Division

Ⓓ 学生センター

Center for Student Services

学務課（2階）

Educational Affairs Division

学生生活課、入試課（1階）

Student Support Division, Entrance Examination Division

Ⓔ 学術情報課

Library and Information Division



# Memo



## 第52回研究大会

### 参加に際してのご注意とお願い

#### 【対面開催】

・対面開催です。オンライン対応はありません。当日、会場までお越しください。なお、宿泊の斡旋はいたしません。各自で手配をお願いします。

#### 【申し込み・総会欠席の場合】

・事前申し込み制です。  
・参加申込みのほか、総会の出欠確認、欠席の際の委任状の受付もPeatixにておこないます。研究大会に参加されない方もPeatixにアクセスして手続きをお願いします。

英語圏児童文学会西日本支部Peatix「英語圏児童文学会第52回研究大会」

<https://52congress-2022.peatix.com>



#### 【入構票】

・奈良女子大学キャンパスに入る際に「入構票」が必要です。学会の開始前は混雑する可能性もありますので、下部を切り取り、必要事項を記入して、事前にご用意いただくことをおすすめします。

#### 【会場内での注意事項】

・会場ではマスクの着用をお願いします。適宜、換気をおこない、対人距離をとるなど、感染対策をおこないながら実施いたします。ご協力をお願いします。

・昼食は各自でご用意ください。会場での飲食は可能ですが、ゴミはすべてお持ち帰りください。昼食休憩は長めに取っておりますので、近辺の飲食店や奈良公園でのランチもおすすめします。

・飲み物は自動販売機コーナーをご利用ください。

・会場での印刷、コピーはできません。配布物はすべてあらかじめ印刷してお持ちください。

・会場内での物品の販売、商行為は禁じられています。ご著書の見本の展示、チラシの配布などは可能です。その際は、実行委員の許可を得、その指示に従ってください。

#### 奈良女子大学キャンパス入構票

入構の際に必要です。切り取ってご使用ください。 **1日目用**

2022年 11月 12日	
所属	
氏名	
検温結果	
<input type="checkbox"/> 37.5℃ 未満です。	
各自で✓をつけてください。	
※ 37.5℃以上の場合は入構できません。	

(2022/11/12.13 英語圏児童文学会参加者)

入構の際に必要です。切り取ってご使用ください。 **2日目用**

2022年 11月 13日	
所属	
氏名	
検温結果	
<input type="checkbox"/> 37.5℃ 未満です。	
各自で✓をつけてください。	
※ 37.5℃以上の場合は入構できません。	

(2022/11/12.13 英語圏児童文学会参加者)